

チャレンジ！！オープンガバナンス 2016 市民／学生応募用紙

地域課題タイトル (注)	No.	タイトル	自治体名
	30	地域全体で子育てを支えるまちづくり	川崎市宮前区
アイデア名 (公開)	子どもの成長はみんながうれしいプロジェクト ―かけ算九九暗唱から始めるまちづくり―		

(注) 地域課題タイトルは、COG2016 サイトの中に記載してある応募自治体の地域課題名を記入してください。

1. 応募者情報

チーム名 (公開)	学校と地域をつなぐ地域教育コーディネーター「風の泉」		
チーム属性 (公開)	☒ 1. 市民によるチーム ☐ 2. 学生によるチーム ☐ 3. 市民、学生の混成によるチーム		
代表者情報	氏名 (公開)	鴨志田 由美	

※ 公開条件について

次ページ以降の「2. アイデアの説明」でご記入いただく内容は、内容を確認した上で、クリエイティブ・コモンズの CC BY (表示) 4.0 国際ライセンスで、公開します。ただし、申請者からの要請がある場合には、CC BY-NC (表示—非営利) 4.0 国際ライセンスで公開しますので、申請の際にその旨をお知らせください。いずれの場合もクレジットの付与対象は応募したチームの名称とします。

(具体的なライセンスの条件につきましては、<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/legalcode.ja>、および、<https://creativecommons.org/licenses/by-nc/4.0/legalcode.ja> をご参照ください。また、クリエイティブ・コモンズの解説もあります。<https://creativecommons.jp/licenses/>)

(注意書き)

<応募の際のファイル名と送付先>

1. 応募の際は、ファイル名を COG2016_応募用紙_具体的チーム名_該当自治体名にして、以下まで送付してください。東京大学公共政策大学院の COG2016 サイトにある応募受付欄からもアクセスできます。 admin_padit_cog2016@pp.u-tokyo.ac.jp

<公開非公開など>

2. アイデア名、チーム名、チーム属性、代表者氏名、「アイデアの説明」は公開されます。
3. 上記の公開は、内容を確認した上で行います。(例えば公序良俗に違反するもの、剽窃があるものなどは公表いたしません)
4. この応募内容のうち、「審査項目自己評価」は、非公開です。なお、内容に優れ今後の参考になりうると判断したものは、公開審査後アドバイスの段階で相談の上公開することがあります。
5. 「アイデアの説明」中に、文章、写真、図画などで応募したチーム以外に知的所有権が属する箇所がある場合には、法令に従った引用や知的所有権者の許諾を得るなどをした旨をそれぞれ注として書いてください。「審査項目自己評価」中も同様をお願いします。

<チームメンバー名簿>

6. チームメンバーは別紙のエクセルファイルに記載して提出してください。(2. の扱いによる代表者氏名を除き、他のメンバーに関する情報は COG 事務局からは非公開です。詳細は別紙をご覧ください。)

2. アイデアの説明（公開）

データや資料を活用して課題の具体化とその解決につながるアイデア（公共サービス）のストーリーを語ってください。

(1) アイデアの内容（公開）

アイデアは、だれがする、何をする、どこでする、いつする、どのようにするものなのかを考えて、各要素を入れて内容を描きストーリーを整理していくとよいでしょう。以下の欄内でご記入ください。（必要に応じて図表を入れても構いません）

宮前区は0歳から14歳の年少人口が市内で最も多い区である。また、東京都や横浜市からの転入者も多く、子育ての環境は変化している。宮前区が「地域全体で子育てを支えるまち」となるためにも、保護者や学校の先生だけでなく地域の大人も子育てに参加し、地域全体で地域の教育力を高めることが、豊かなまちづくりにつながると考える。

「風の泉」は、2010年より、地域の人間関係の希薄化を課題に、学校を地域の中心としたまちづくりができないかと市民館での市民企画講座、シンポジウムなどを行ってきた。そして、2011年には学校では、学習内容の増加や共稼ぎ世帯の増加などが原因と考えられる、子どもたちの学力低下が課題となっているということを知った。先生は多忙で生徒一人ひとりを見る時間をとることができず、困っており、特に学校での最初の学力のつまずきに「かけ算九九」があり、先生方が子どもたち全員の暗唱をみきれていない現状があった。九九の暗唱を聞いて、確認するのなら、保護者や地域の人でも簡単にできることから、子どもたちのかけ算九九の暗唱を手伝い、子どもを励まし、できたことを褒めるという行為による世代間交流を行うプログラムを考えた。

現在、区内8か所、区外3か所の学校でプログラムは実施されている。子どもの成長は、保護者も地域の人も学校の先生も皆が嬉しく感じることから、このプログラムが地域に広がることで、子育てを支えるまちづくりができると考える。

今回の提案は、このプログラムを「かけ算九九」のみに特化せず、学校毎に特色のある活動へと転換し、学校と地域をつなぐ「コーディネーター」を中心に区内で関係する組織や企業などとネットワークをつくっていくことである。そして、文部科学省が中教審答申「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」（H27年12月）で推奨している「地域学校協働支援本部」の活動につなげていけるようにできれば、行政、学校、地域の大人との協働によるまちづくりが実現すると考える。地域や保護者、学校がつながり、子どもの成長を地域で支え、そのことで地域が活性化する仕組みづくりを関係する行政や大学、既に活動するNPOや企業とも連携しながら、考えるプロジェクトとして、地域で子育てを支えるまちづくりのアイデアを提案します。

かけ算九九のボランティアがプログラムとして行う活動は、子どもたち（主に小学校2年生）のかけ算九九の暗唱を聞き、うまく暗唱ができれば褒め、チェック表にシールを貼る。できなくても頑張ったことを褒めて、再度チャレンジをするように励ますという、簡単な活動である。

かけ算九九暗唱プログラム全体の段取りとして、まず、かけ算九九のプログラムを実施する学校の詳細を得る。学校の授業の中で行うのであれば、先生方の協力が不可欠であり、放課後であっても保護者の許諾が必要になる。そして、学校と実施する日程や学校内の教室、または図工室、音楽室など、椅子や机が動かせる会場を調整する。実際に行うコーディネーターは、その学校の中の保護者、あるいは元PTAで地域にも知り合いのある方などが適している。

ボランティアを集めるには、学校の先生の協力を得て、学校内の保護者へ通知したり、地域の町内会、自治会などへよびかけたりし、かけ算九九の暗唱を聞くボランティアを集める。実施はかけ算九九が授業で行われる2年生が対象であるが、授業と並行で行う場合や全て終了して行う場合、3年生の夏休みに行うなど学校の状況により、対応は可能である。

おおむね、1回に30分から45分程度の時間で、回数は3回から7回ぐらいで、九九の全ての段ののぼり、くだり、ランダムにした場合で暗唱ができるように工夫する。

この活動を行いながら、子どもたちの頑張る姿を共有する大人を地域で増やし、教育委員会、地域教育会議、まちづくり協議会などと連携していく。特に学校で地域との橋渡しをしている、地域コーディネーターのネットワークをつくり、各学校での取り組みの情報交換、先進事例を研究する会議などを立ち上げる。また、ICTを利用し、情報発信を行うことで、地域の理解者、協力者を増やし、「地域全体で子育てを支えるまちづくり」をすすめていく。

(2) アイデアの論拠（公開）

アイデアの論拠（なぜこのアイデアにするのか）を、それをサポートする数値データ（実績、統計やアンケートなど数字であらわされるもの）や証拠（資料や計画、既存の施策など）（以下：総称して「データ類」といいます）などを含めつつご記入ください。数値データや証拠は出所を明らかにしてください。以下の2ページの欄内におさまるようお願いします。

・川崎市立土橋小学校（コミュニティスクール）の学校運営協議会が2012年から行った学校評価（学校評価部担当）で、1年生から毎年児童の自己評価を採ったところ、2年次につまづいたことがその後の学校生活（学業や学校生活）に悪影響を及ぼし、負のスパイラルを引き起こす事が確認された。子ども達は勉強が分からないと学校がつまらなくなると反応し、学習が出来ないことが恒常化するとストレスもたまり、学年があがるにつれ友人関係にも悪影響が出ている。

それまでも、地域や保護者が学校と協働し様々な事業を展開してきたが、社会教育と学校教育の融合を継続的に事業化するためには、単にイベントや単発の行事に終わらない学習の支援という形が最も効果があると考え、かけ算九九の暗唱定着をプログラムのモチーフとした。

実際、学校ではかけ算の概念を授業で教えても暗唱の定着を確認するほど時間や労力の余裕がないのが実情であった。家庭においても、家庭教育力の2極化が進み、子どもの学習を家庭で見守る親ばかりでないことも地域教育力を促進させなければならない背景であった。

最終的には、授業に入ることを目指したが、最初は放課後希望者にプログラムを実施することとし、スタートした。（現在、ほとんどの実施校は、授業に入っている）

また、一度実施開始した学校でやめたところはなく、継続的に実施されている。支援実施者も保護者や、OB・OG、地域の市民、中高生、学校職員など多岐にわたり、地域の中の学校を具現化している。

・実施した学校でのアンケートより

既にプログラムを実施した学校では、子どもたちからは、「かけ算九九ができるようになって楽しい。」「褒めてもらえて嬉しい。」などの感想があった。参加した保護者からは「自分の子どもに叱ってばかりいたが、ほかの子どもを見ることで、子どもの良いところも見えるようになった。自分の子どもももっと褒めようと思った。」という声もあった。担任の先生も、「教室では見せたことの無いほど、集中している子どもの姿を見た。」「嬉しそうな顔をしていた」という声も出ている。そして地域のボランティアからも「子どもたちの頑張る姿に励まされる」「自分が子どもたちの成長に役に立てることが嬉しい」という声をもらっている。

（以下、以前に作った資料より）

かけ算九九暗唱プログラムの特徴（仕組みと効果）

（仕組みがシンプルなのに、関係者みんなに実りが多い）

＜仕組み＞

児童のかけ算九九の暗唱をボランティアはただ一生懸命聴くだけ

子ども

学校で習った段を数回に分けて実施する。小学2年生から3～4年生くらい（学習が出来ない事を恥ずかしく思わない学年）まで実施可能。

ボランティア

暗唱がスラスラ出来れば誉め、合格シールをチャレンジシートに貼り、つまづけば励まし、出来るまで何度もチャレンジするよう見守り、全段暗唱できたら、九九名人になれたことを一緒に喜ぶ。実施のたびにボランティアは振り返りをし、次回への改善、共有をする。

先生

全体の様子を見たり、支援の必要な児童のヘルプにまわる。

学校

自校の実情に合わせられる。（実施時間や回数などカスタマイズできる。）

九九暗唱をただ聴くだけなので資格が無い地域の人や保護者などに頼め、PTA やコーディネーター、教頭等に簡単にボランティア募集をしてもらうことができる。学校に入るための講習などを行うので、学校の負担も少ない。経費も学校にあるものの利用でほとんど済む。

《効果》

「かけ算九九の暗唱」をツールに、関係する児童・先生・保護者・ボランティアみんながWIN-WIN の関係になれる。

「子どもの成長はみんながうれしい」と共感する地域教育コミュニティができる。

子ども

児童は、大人が自分の学習を真剣に見て、自己決定を見守り、一緒に喜んでくれることで大人に信頼感を持ち、それが生きる力になる。1 対 1 で「ちゃんと聴いてくれる」。自分で決めるのは楽しい（どの段をやるのか、誰に聴いてもらうのか、どのシールか）

褒められて嬉しい。できるようになって嬉しい。友達と出来て楽しい。自分で決めるとやる気になる。

ボランティア

子どもたちができるようになったことを喜ぶ姿、シールをもらったと嬉しそうに報告しにくる姿に喜びを感じ、役に立つ喜びも感じることができる。地域の教育力として社会参画する。

保護者（ボランティア）

他の子どもの良いところを見ることができるようになり、（いつも叱っている）自分の子どもを客観的に見ることができるようになった。先生の苦勞を知り、学校への理解が深まった。

保護者（家庭で）

子どもが九九を言えるようになって嬉しい。親が見てやれないので助かる。子どもが楽しそうに九九の話をし、自発的に練習するようになった。暗唱を聞いてくれと頼まれた。

先生

全員の子どもの暗唱を先生 1 人では見ることはできないので、助かる。子ども 1 人ひとりが励まされ、褒められ、嬉しそうな表情、頑張る姿、教室では見られない子どもたちの表情に出会うことができる。

学校

保護者やボランティアが入ることで地域の中の学校観を推進できる。

(3) アイデア実現までの流れ（公開）

アイデアを実現する主体、アイデアの実現にいたるプロセスとマイルストーン等、アイデア実現までの大まかな流れについて、以下の欄内におさまるよう、簡潔にご記入ください。（必要に応じて図表を入れても構いません）

「実現の主体」

学校と地域をつなぐ地域教育コーディネーター「風の泉」と、各小学校、宮前区役所、（地域振興課、子育て支援課など）、地域教育会議、まちづくり協議会、川崎市教育委員会など。

「実現にいたるプロセス」

1. 全市の校長会や各区の小学校校長会等でプレゼンテーションを実施。
2. 小学校校長や2・3年生の担任団などから市民館や風の泉に説明会の申し込みが来る。
3. 風の泉が学校に赴き、プログラムの内容、実施の方法、準備（特にボランティアの募集、準備用品の作成）についての説明会を実施。特にボランティアの募集についてはそれぞれの学校にあった方法を提案。
4. 学校の実施意向を確認した後、実施日時・実施回数、ボランティアの募集について作業日程を確認する。保護者説明会等でもボランティアの呼びかけを実施。
地域については町会自治会や、地域教育会議などともネットワークする。
5. 授業の学習支援に入るボランティアの心得を配布し、当日はプログラムの実施インストを行う。
6. 授業後にボランティアの振り返りを行い、気づきや発見を共有する。
7. 児童や先生にアンケートを採り、次回の実施に向けて改善を図る。
次年度からは、それぞれの学校でプロジェクト方式の実施組織を作る。（ボランティアが中心になったり、地域のコーディネーター組織が中心になったりする）

「プロジェクトチームの立ち上げ」

- ①活動に賛同する、関係者を集め、プロジェクトチームを作る。
（事務局機能を分担する。連絡、広報、記録、会計等）
- ②学校にいる既存の地域コーディネーターへアンケートを実施し、学校支援の現状や工夫していること、困っていることなどを聞く。
- ③アンケートを元に、良い取り組みや、何が壁となっているのかなどを洗い出し、プロジェクトチームでどのような研究会をするのがよいか検討する。
- ④地域コーディネーター、プロジェクトチーム関係者が参加できる研究会を行い、地域の子育てに関わる学校現場での課題を共有する。あわせて、既に行われているかけ算九九の実施報告も行い、子どもや保護者、地域のボランティアへの効果を伝える。
- ⑤研究会の報告書を作成し、関係者へ配布し、地域コーディネーターや関係者が一堂に介して研究会を行う効果を目で見える形にする。

「マイルストーン」

かかわった子ども、保護者、地域コーディネーター、学校関係者、地域の協力者、ボランティアからの声が見える形であげていく。

(4) そのほか（公開）

アイデアのアピールポイントや、アイデア実現に当たっての制約があればそれとその当面の解決方法、さらに将来の発展可能性（例えば「将来的にxxという制約をクリアできれば、追加で○○ということが実現できる」など）について、以下の欄内におさまるよう、簡潔にご記入ください。

「アピールポイント」

かけ算九九暗唱の支援は、子どもの九九暗唱を聞いてあげて、できたら褒めてシールを貼るというとてもシンプルで誰でもできるものである。このプログラムを通して、参加関係者すべてが得るものがある。

子ども達は自分の九九暗唱をしっかりと聞いてもらい、励まされたり褒められたり一緒に共感してもらう体験の過程で、自分が出来るようになることを喜んでくれる重層的な大人（親や先生だけでなく）への信頼感を持つ。加えて出来なければなんども反復練習をすることで出来るようになる効果を実感でき、自学習の習慣が身につく。出来るようになることで達成感があり、シールをたくさん集めた自分への自己肯定感が生まれる。

子どもたちの九九暗唱という学習に関わることで、保護者は学校の先生方の「教える」苦労やたくさんの子どもたちを相手にしている大変さに接し、自分の子育てを見直したり、学校への意識を変えていくことができる。特に場の中の子どもの様子を見ることにより、子どもと教育的にほどよい距離がつかめるようになり、家庭教育も促進される。更に学力について考えたり、個人差についても客観的な見方が出来るようになる。

地域の大人も、子どもの成長に関われることで役に立つ喜びを得ることができ、地域に住む住民としてのつながりを感じることができる。

学校の先生も教室では見られない児童の新たな面を発見することが多く、また多くの地域の大人や保護者と同じ教育情報を共有し、応援を心強く感じて地域を意識するようになる。しかも、学校が負担する費用はシール購入費くらいで準備品もそれほど大きな負担はない。

この活動を行うことで、関わった多くの人々が子どもたちの成長を実感することができ、地域の人や保護者など多くの子どもの成長を願う大人たちが子どもに関わることで、地域で人と関わる機会が増えていくと考えられる。

地域と学校をつなぐコーディネーターのネットワークづくりの実現に向けての制約は、学校との信頼関係を築くことである。学校教員の側から見ると「九九暗唱」は学習ではないととらえられるが、かけ算九九プログラムを実施することで、子どもたちが知らない大人の前で声を出し、聞いてもらう行為は、近年低下しているとされる自己肯定感を持たせ、自信をつけさせ、この成果は学校との大きな絆になる。すべての大人が「子どもの成長に為に。笑顔の為に」の目標に集えばその地域教育力は格段にあがる。すでに学校と信頼関係を持っている組織が中心となり、ネットワーク化を進めると容易に活動が広がると思われる。しかし、実際はそれぞれの組織が目指す活動がすでにあるため、各学校ごとのプロジェクトチームを立ち上げると、ネットワークしやすくなる。

また、「暗唱」することにより覚える内容は、「かけ算九九」という教科につながるものだから良いのであって、今後学校により、九九以外のものに発展させる際には、「暗唱」の持つ、特異性に十分配慮し、コントロールの手段にはならないよう、十分注意をしていきたい。

将来的には、学校に子どもの成長を願う地域の大人が集い、学校の中にコミュニティスペースができるような発展の可能性が考えられる。

その際、大学生などの参加によって児童にとって良いモデルが提示でき更に活性化する。